

三多摩支部

鈴木貴志

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ウインブルドン◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ウインブルドン現象」という言葉があります。

今年は 77 年ぶりに英国人(Andy Murray)が男子シングルスで優勝し、この夏イギリスはかなり盛り上がりました。

個人的には今年初めてウインブルドン観戦にチャレンジ、試合会場に入って少しだけ雰囲気を感じる事が出来ました。

観戦したと言ってももちろん前年末に抽選に申し込んで当選した正規のチケットをもっている訳ではありませんので、当日販売される入場券の行列に並びます。

夏至を過ぎた直後に開催されるこの大会は、始まったばかりの 1 週目ですと陽が暮れる 9 時過ぎまで予選をやっています。

ですので夕方から並んだとしても、入場さえできれば途中からでも試合観戦できる可能性があるわけです。

昼下がりからテニスの隣にある臨時駐車場であるゴルフ場のコースに伸びた列に並ぶこと 3 時間。

並んでいると係の人が番号付きの整理券と、実際に並んでいたという証明シールを渡してくれます。その後暫くすると「列の並び方ガイド」なる興味深い小冊子をボランティアが配布してくれます。というのも、このガイドには、会場内の地図などとともに、「並び方規範(The Queue Code of Conduct)」が掲載されているのです。

これを少し紹介しますと、前夜から並ぶ場合は二人用のテントを用意すること、22 時以降音楽や広場でのボールゲームは厳禁、22 時以降はテント内に入って消灯すること、バーベキューをしてはダメ、宅配ピザを頼む場合はゴルフ場の入り口を指定してそこへ自分で取りに行くこと、などなど。

イギリス人のイベントに対する姿勢といえますか、楽しみ方が推測できて楽しいのですが、日本人ではちょっと思いつかないような事もルールとして書かれているのが面白いところです。

さて、そのような列に並んでやっと入場です。

入場してからさらに「センターコートのリターンチケット」が手に入れば、センターコートや 1 番コートに入ることができます。

ちなみに「センターコート」ですとか「1 番コート」とは、TVでよく見る一流のシード選手が予選試合をする場所です。

この「リターンチケット」というシステムも、ルールを理解するまでは想像すらできませんでした。

これは簡単に言えば、抽選で当選した「センターコート」の券を持っている人が、「もう、今日はこれでいいや」と試合途中で帰る際、自分のチケットを主催者に返却、それが再販されるというシステムです。

どうもイギリスでは、この自分としては使用済みのチケットを返却するというのが当たり前前のルールになっているようで、こちらではダフ屋はほとんど存在しません。

なんといいいますか、階級社会、ジェントルマンのマナーという印象がします。同時にまた主催者もそれを前提としている、というような大きな意図も感じられます。

そういうジェントルマンのルールでもって、尚且つ地元のウインブルドンで大会やっている。なのに、優勝は外人ばかり、というはやはり一部のイギリス人として内心忸怩たるものがあつたのでしょうか。BBCの朝のニュースの取り上げ方を見ても感じられました。

異国でビジネスをする場合にそのルールの基本である法律を知る・理解するのは、まず最初にやらねばならないことだと思います。

その際に重要な点は、そのルールが判例法という論理に基づくのか、成文法なのかということも一つあるのではないのでしょうか。

日本人はどちらかというと、判例法の文化は理解できるのですが直ぐにはなじめない、というところがあるように感じます。

ビジネスパートナーが違うロジックで文化を積み重ねてきているのだという意識を持てるかどうかだけでも、お互いの理解の度合いが違ってくるのではないのでしょうか。

ロンドンの中心を歩いていると、欧州の各国だけでなく、東・南・西アジアやアフリカと本当に多種多様出身の、それも老若男女が歩いているのが解ります。

イギリス人が異なる文化を受け入れているということと、77年ぶりのMurrayの優勝で盛り上がったということと、理解して実践するにはいろいろな視点があるように思われます。

Eom